

日本で、企業の株主総会が集中する時期になってきました。

少し前になりますが、2017年2月9日、米国証券アナリスト協会（CFA Institute）のホームページの「Market Integrity Insights」というコーナーにて、今年の世界各国のコーポレートガバナンスの注目点についての記事が掲載されています。各国の状況がわかりやすく説明されており、有益な記事でした。こちらの一部を紹介しつつ、日本における当社の着目点についてご紹介しましょう。

記事の執筆者の Matt Orsagh 氏によると、世界的には、企業において統合報告の形での情報開示、企業活動における、より包括的な情報開示が進む方向であることなど、良い兆候が見られるとのこと。

国別に見てみると、まず、フランスでは、株主総会シーズンにて、エグゼクティブの報酬が昨シーズンに引き続き、注目点となり、日本では英語のレポートが充実してきたことなどが挙げられています。

メキシコについては、たとえば海外の投資家から、現在、株主総会の開催告知が2週間前になされているところを、せめて1か月前に行うよう求められています。

英国では、FTSE Index 350 企業におけるコーポレートガバナンスコードの遵守状況は良好です。まだ一部の企業で課題として残っているところを挙げるとすれば、取締役会の半数以上を独立した社外取締役とすることです。一方、昨年株主総会で話題となった、パフォーマンスとの相関が見えにくいエグゼクティブの報酬については、方針の明確化が進んでおり、このトピックに関しては次の段階に行くだろうと見られています。

米国については、株主が、特定の取締役候補者の選任を株主総会議案として提案し、会社から株主に送付される書類に掲載することを請求できる仕組み（proxy access）の拡がりが見られています。

各国の事情は様々ですが、日本では現在、日本を代表するようなグローバルな超優良企業とされていた会社の経営破綻が取り沙汰されるなど、コーポレートガバナンスの課題を浮き彫りにするような事象が目立っています。一方、悪い情報が隠し通されずに、明るみに出されていることは、コーポレートガバナンスの課題に対する改善の、一つの突破口を示しているように見えます。問題を発生させてしまった企業が、そこから何をどのように学び、どのように多様な視点を活かして、風通しの良い社風をつくっていき、そのことが将来の経営の競争力にどう結び付くか、SRI の観点から、注目していきます。

参考資料:

2017年2月9日 CFA Institute HP Market Integrity Insights「CorpGov Roundup: Integrated Reporting, Proxies, Stewardship Codes, and More」by Matt Orsagh, CFA, CIPM

<https://blogs.cfainstitute.org/marketintegrity/2017/02/09/corpgov-roundup-integrated-reporting-proxies-stewardship-codes-and-more/>